

シベリア抑留記

山口県 末広元一

出生から入隊

大正八年一月一日、山口県吉敷郡大道村（現防府市）に鉄道員の長男として出生。

昭和十一年、県立防府中学校卒業。同十三年、県立下松工業学校第二部卒業。同年四月より十五年一月まで佐世保海軍工廠に勤務。

入営当時、両親、祖母、弟四人、妹一人の九人家族。

昭和十五年二月二十八日、徴兵にて広島市集合、渡満。ハルビン第十二航空教育隊入隊。装備、特に軍服については、同年九月、幹部候補生として所沢陸軍航空整備学校に分遣の際持参した第一装、第二装を下士官達が要望し、交換したように良品であった。

整備学校修了後、第三十飛行場大隊に勤務中、二、

三の新設飛行場大隊を編成したが、車両等は新品が到着したように記憶するも、内地よりの兵の銃剣の覆いが竹であったのを記憶している。

ソ連侵攻

十九年六月より、延吉（間島）飛行場にて臨時教育隊編成。特別幹部候補生の教育に従事。二十年八月七、八日は約三百人集合。九日未明、ソ連侵攻の報を受けた。

当教育隊は第七野戦航空修理廠（ハルビン）の指揮下にあつたので連絡したところ、初年兵は直ちに帰宅させ（全員満州在住のため）、他は残務整理後本廠まで来れとのことで、十五日午前到着した。

終戦

本廠に到着したら、重大放送があるとのことでラジオの前に集合。陛下の放送があり、終戦——敗戦と知り呆然とした。その夜、工員達から新型爆弾とは？との質問を受けたが、もちろん詳しく知るはずもなく、ただ一、二年前、我が軍も研究中某技師の殉職事故があり、これがため実用（？）にならないとの判断で研

究中止になったとか聞いていたので、そのようなことを話したと思う。

我々は別の行動をとるようにとのことで列車で新京まで行き、飛行場に在任の飛行場大隊へ編入を申し出た。数日後、建国大学、医科大学等へ収容。武装解除の記憶はないが、小銃等はこの頃提出したと思う。また、この頃軍官舎にも滞在したが、行った時驚いたのは、いかに慌てふためいて出発したのかが一目瞭然、足の踏み場もないとはこのことかと思っただけ室内は雑然と衣類等が散らかり、箆筒や引き出しは開け放して衣類がぶら下がっており、押し入れももちろん開けたまま。軍関係者のみ早く避難させた云々との悪評があった由だが、軍司令部にいた者の言によれば、民間の方に避難を通知したが、二、三時間では準備できないと拒否された故、やむを得ず官舎の家族に僅か二時間ぐらいで出発を要請したとのことであった。

官舎に滞在中、ソ連兵が度々訪問してくれた、もちろん物欲しさだが……。特に腕時計を多く集めたら早く復員できるとの迷信があるらしく、中には数個も腕

にはめていた者もいたが、止まるとネジをかけるのが分からず、壊れたと言って捨てる者もいたとか。その他いろいろの物品をせびり、また掠奪するので、我々は彼らを「ブツヨクスキー」と命名した。

また、彼等も欧州戦線から直接移送されたのか服装も汚れ、全く汚らしい風体であった。また彼等は無学文盲が多く、公用外出の際の証明書も判らないので困ったという話も聞いた。某君はハルビン学院出身でロシア語ができるらしく、あるとき乱入したソ連兵士に一喝したところ、スゴスゴと逃げ去ったので、何と言ったかと尋ねたところ、「ここはお前達の来る所ではない、帰れ！」と言ったそうで、彼の度胸に感心したものである。なお、彼とは収容所も最後まで一緒であったが、日本人通訳の多くは、あたかもソ連人のような態度で我々に接していたが、彼はいつも我々の肩を持って通訳・交渉し、信頼と感謝をされていた。我々は団体で行動していたので現地人との交渉がなく、直接被害や迫害を受けたことはない。

シベリア抑留地への旅

新京で収容所生活中心と、終戦後、行を共にした将校三、下士官約十、外兵士達三十数人は、それぞれ作業大隊に編入され分散した。部隊編成でなかったため武装解除はなかった。また将校はソ連収容所（マルシャンスク）到着後、軍刀を提出した。

昭和二十年十月下旬、「いよいよダメイですな、楽しい正月は懐かしい故郷ですな」などのソ連将校の言葉に、半信半疑ながらもそうあれかしと有蓋貨車に乗り込んだが……。

日本に帰るには新京より南下するか東へ行くはずだが、列車は北向きに走り、ハルビンに着いて万事休す。遂に北安を経て黒河に到着。すでに一面結氷の黒龍江をなぜか蛇行しながら、二時間もかかって対岸のブラゴエシチェンスクへ。遂に一縷の望みもプッチリ切れて、列車はシベリア鉄道を西へ西へと走り出した。

貨車の中央にストープ（があったように思う）、後に各二段で計四十人位か。一梯団千人単位なので一貨車はこれくらいの人数だったと思う。しかし、窮屈

だった。困ったのは、停車時間が不規則で予定時間が判らないこと。それにしても、用便中でも誰一人として取り残された者がいなかったのは不思議だった。用便の時は、周りに群がった子供達に帽子を取られないように片手で押さえ、片手は局部付近を隠す。まだ十分に排出してないのにゴトンと貨車が動き出し、慌ててズボンを引き上げながら貨車を追っかける人々、全く必死の形相も、あられもない形態も笑ってはいられない。

小生も途中で一、二日間下痢をしたが、車中の者、特に後方の者達には多大の迷惑をかけたことに、五十年経過した現在でもすまないと思っている。というのは、車両の真ん中に小さい穴を開け（木造ゆえ開けられた）、ここより走行中でも便意を催したら排便しなければならなかった。音と臭気、さぞや苦難の一時であったと思う。すみませんでした。

約一カ月の間の収容所までの途中、一、二カ所で衛生施設完備（？）に感嘆したことがある。すなわち、入浴施設と虱退治である。衣類一切を鉄の輪に通し熱

気消毒で虱達一コロ？ 幸い途中は虱に悩まされることはなかったが、マルシャンスクに到着の夜から彼等の来襲に悩まされることになった。入浴は収容所（一週に一回だったと思う）でも同じだったが、キャラクターの倍ぐらいの体積の石鹼（柔らかい洗濯石鹼の感じ）に水は約三、四リットル入りの手桶一杯（二杯ではなかったように思う）。初め頃は石鹼が残っているように気持ちが悪かったが、慣れるにつれ上手に洗えるようになった。

何しろ貨車の中なので窓もなく、沿線の様子も時たまの停車時以外あまり見ることもできなかったが、何より感じたのは、ただただ広いこと、荒漠殺風景な見渡す限りの荒野、一日中走っても駅は二、三駅、家並みを見つけることは、東海・山陽本線で家並みを見ないこと以上にむづかしい。

新京を十一月下旬出発、ウラル（この付近は電化されていた）を越え延々八千キロメートルの長旅の末、十二月二十三日、モクスワ南二〇〇キロのマルシャンスク収容所に到着した。

駅より収容所まで徒歩であったが、収容所まで来ると塙の内側から、「英語が話せるか？」と言う者がいた。ドイツなまりの英語と思ったのか、我々の一人が「ドイツ語が話せるぞー！」と言うと、何か嬉しそうに喋っていた。この収容所は、日本人将校三千人、兵二千、外、ドイツ、ポーランド、ルーマニア等三千人くらいいるとのことであった。

ドイツ兵は、日本兵は将校と仲が良いのが羨ましいと言っていた。我々の中にも早速我が国の軍隊、天皇に対し批判する者がいた。これ等に対してドイツ兵（将校）は「よくもお前はそれで将校として務めていて恥ずかしくないな」とやり込める者もいた。また彼等は、我々はソ連に敗けたのではない、アメリカに敗けたのだと公言して、ソ連兵に対して決して卑下することなく堂々と渡り合い、我が日本人の民主指導者と称する者との信念と民族としての自信の差には感心した。

作業でトマトの苗の植えつけに従事した連中が、ノルマ三百本と言われ約二時間弱で終了した。翌日は五

百本、翌々日は八百本とノルマが上がった。これを聞いたドイツ兵は、なんてお前達は馬鹿なことをするんだ、三百本と言えば三百本を一日で終わるようにすればよいのだ、その方法はこうするのだ、と、溝に横に寝そべってユックリユックリと一本ずつ植えつけてみせたが、気の短い日本人にはとてもそうはできそうにない。で、余った苗はどうするのかと聞いたら、掘って一緒に埋めればよいとの教示を受けたが、結局彼らは三百本くらいで、日本人は千二百本くらいになったと聞いた。お前達がソ連に本気で協力する気が知れんとあきれた口振りであった。

抑留地の生活

抑留のマルシャンスクより約二十キロ離れたビュンスクという僻村に五百人くらいで派遣(？)され、伐採作業後、軽便鉄道建設作業に従事した。

伐採作業はノルマ一人一立方メートルということだったが、柔らかい白樺の木が多いとかなり楽にこなせたように覚えている。何と非効率なことと思っただけは、往復約六時間(もちろん徒歩)、途中、河幅二十

メートルくらいの橋が壊れ、残骸の材木の上を軽業よろしく渡る場所もあり、現地到着後三十分間の作業。径二十〜四十センチくらいの立木を四、五人で一本切り倒して作業終わり、一路帰路へ。

また、マルシャンスク当時、数人がトラックで薪材を伐採(採取だったかもしれない)に行っていたことがあった。我々を置いてトラックは帰り、待てど暮らせど迎えに來ない。空腹で雪を食っても腹の足しにならぬ。マホルカもなくなる。まさか我々を降ろした場所を忘れてこのまま捨てて置かれるのではないかと心配しながら夜を明かしたが、翌日の午後ようやく迎えに來た。ホッとしたことは言うまでもないが、途端に空腹感がどっと身体中を巡り、雪っ腹でフラつく足でようやくのことでトラックによじ登って帰還した。心配していた残留者達は、ありがたいことにありとあらゆる容器を集めて、昨夜よりの四食分を残して置いてくれた。ヤレありがたやと早速冷たい食事にありついたが、何と四食分がペロリと腹中に収まったではないか。でも「満腹満腹」とはいかなかった。これではだ

んだんと体が消耗するのはやむを得ないなあと改めて感服(?)した次第であった。

マルシャンスク収容所に到着の夜より虱の襲来には悩まされた。それまで経験がなかったので余計こたえたかもしれない。とにかく、チクッチクツと寝る間もないほど襲来し、首の後ろは凸凹になった。

発疹チフス等は幸いに発生しなかった。衣服の消毒、入浴は前述のとおり。身体検査は誠に簡単、尻の肉をつまみ、「アジーン、ドヴァー、ツリー」と判定。

さすがソ連の先端医療(?)と感心した。発熱も三十八度だったか以上でないと認めてもらえない。最も気の毒だったのは、神経痛等外部に現れない病気だったようだ。ソ連軍医中尉がいたが、彼等は日本軍の衛生上等兵ぐらいの知識しかないと言う軍医もいた。

このことは次のようなことでも裏付けされると思う。ある軍医(慈恵医科大学出身)にソ連軍医が、お前は医師になるまで何年学校に行ったかと尋ねたので、「二十年だ」と答えたところ、「何だ、そんなに学校へ行ったのか、俺なんかは八年で軍医になったの

に」と言ったとのことである。で、ソ連兵達もソ連軍医の診察は受けず、我が軍やドイツ軍医に受診をしていた。

労役

我々は将校梯団のためか、他の人の手記のような苛酷なノルマや強制もあまりなかったように思う。

労役の時間については、八時間労働を厳守した。時間外、夜間労働等をした時は累計八時間で一日の休日を獲得していた。なおビュンスタだったと思うが、十人単位に一人の作業免除者を交替で指名し、この者は野草等を採取・調理してビタミン不足にならないよう留意した。ビュンスタでは近辺に幅二十―三十メートルぐらいの流れの至ってゆるやかな河があったが、河底に多くの大きな貝があり、皆で争ってこれを探り煮て食って、中には夢で貝に追っかけられたと言う者も出た。しかし、間もなく乱獲のためか獲れなくなつた。四―五メートルも岸辺より離れると急に深くなり潜ることができず、貝採取もやんでしまった。ところで、この河も木橋が朽ち落ち、渡し舟があったが、少

しの風でも上流に流されるほどで、筏を組んで下流に運ぶのに徒歩で一日行程の距離を何と一週間もかかったとあきれていた。内地の急流を見慣れている我々には想像もつかない流れ、いや、湖としか言いようがない情景であった。

ノルマを達成しないで処分を受けた記憶はない。というのも、ときどきノルマ係に皆でワイロを送っていたからかもしれない。いつだったかは忘れたが、彼に子供が多いので、僅かな食糧を与えた記憶もある。一人十グラムでも百人では一キログラムとなるので馬鹿にならない量だったに違いない。

時には監視兵なしで十人ぐらいの小グループで労役に出たこともあった。炭焼きに行った時は、何しろかまどの材料が砂なので火焰が吹き上げて苦労したが、作業へ行く途中で農民よりジャガイモの大きいのを購入して焼いて食べる楽しみがあった。聞くところによれば、彼等は供出用には上部のみ掘って小さいのを充て、やや深くにある大きく且つおいしいのは家用やヤミ販売用に使っていたとか。

伐採した樹木の枝はすぐに焼却したが、その最初の火種には苦労した。もちろんマッチはないが、器用な者がいて、火打ち石を考案して大いに助かった。よくも材料のひも、金属、石を集めたものと感心した。一日中燃やした残り火が翌日にも埋もれ火となって残っているのので、二日目からは白樺の皮に移し種火とした。

抑留者の統制管理

捕虜規則には、将校は労役免除とか聞いていたが、我が軍はこの条約に加入していないとか、また加入していても相手がソ連のことゆえ、何にもならない。一部を除き大部分の者が労務に従事した。おそらく幹部がソ連側との協議、いや命令で我々に指示したと思う。もちろん選択の自由とか基準はなかった。

労働に耐えられないと、二人、就労しない者がいた。一人は身体虚弱、一人は右手指損傷（手榴弾暴発）で常時包帯していたが、両名は留守番役であった。

健康の管理については自分自身で留意する外なかつ

た。

朝夕の点呼は記憶が定かでない。作業への出発の際の人員調べはおよそ噴飯ものであった。五列に並んで数えるのだが、将校は一、二回で済んだが兵の時は五、六回数え直す。彼等は掛け算ができないらしく、五、十、十五と数えていくうちに、列の並びが悪く注意するうち今までの数を忘れてしまい、また最初よりやり直し、二百人を数えるのに三十分もかかった朝もあった。

作業場への往復に合唱を強要する監視兵がいた。何しろすぐに終わると「まだまだ」と催促するので、長い歌詞を繰り返し返した。「富士の白雪ヤノーエ」がお気に入りのようであった。監視もある程度大目に見てくれたようで、途中ワラビを各自が一握りあて持ち帰り、空腹の足しにしたことも数回あった。

私は二年間の抑留であったが、ソ連より支給された物品は木製の小さなスプーン一個のみ。幸い衣服類は持てるだけ携行したので、どうやら過ごすことができ

食事については前述もしたが、将校梯団のためか、一日三食のうち一食は米類であった。ただし、脱穀搗精が粗末で、何と糲殻つきが一食（手の平に軽く載るくらいで百五十グラムもなかったように思う）に数十粒もあるのには弱った。もちろん一粒一粒、殻をよけてありがたぐたぐたいたいだいたものである。

肉類は全く記憶になく、時に塩魚や小魚があった。ソ連の魚は頭がなく尾だけかと言うほど尾の部分が多かったように思う。厳冬の作業中、円匙えんげに泥がついたまま塩魚をのせて焼いて食ったこともあった。

ビュンスクでは二週間、三食とも大豆粉のみだったこともあった。石鹼等を住民に売り、主として馬鈴薯を購入して飢えを凌いだが、夏季になっても野菜といえはトマトくらいのも、もっぱら前記のように当番制で野草採取や、各自で貝、ワラビ、シイシバ等を採取したが、ワラビはどんな調理をしても苦くて、内地とは違うのではないかと皆で言っていた。茸も沢山至る所に生えていたが、中毒がこわくて一度も口にしたことがなかった。

なお、調理の味付けはいずれも岩塩のみ。配給の固形の大きな岩塩を一度煮沸してから粉状として使用した。

休日は一週間に一日、また、前述のように時間外が八時間になった時は一日の休日を獲得した。娯楽はもっぱら麻雀だった。携行した本物もあり、また現地でも器用にも制作した物もあり、大繁盛であった。起床と同時に開始し、作業出発まで寸暇を惜しんで精進したものであった。

施設については、どこもバラック建てで二段、ビュンクスでは一段であったが、二年間電灯の下で暮らしたことはなかった。採光・採暖も十分でなく、日中でも薄暗かった。ペーチカもただっ広い一棟に一個で、厳冬をよくも過ごせたものと今さらの如く思い出す。

居住密度、今も記憶している。一人当たり居住面積、幅七十八センチなり。寝返りもうっかりできない窮屈さであった。よくもまあ我慢できたものだった。

十二月二十三日收容所到着、一月一日全員が集合し、隊長のK大佐の訓辞があった。警戒してか、当た

り障りのない訓辞ではあったが、翌日には「訓辞にあった祖国再建云々は、ソ連民主主義を完全に吸収してのみ成り立つのであるから、これからも偉大なるソ連、敬愛する大指導者スターリン大元帥に感謝しつつ、ソ連の一日も早い復興のために労力を提供しなければならぬ」と。早速に民主指導者面をした者が吠え出した。そのうち満州の新聞社より没収したとかの活字を使って「日本新聞」の諸戸文夫のペンネームでの洗脳教育が始まり、また所内では壁新聞が張り出されたが、一部を除き、表面ではいざ知らず、内ではせせら笑って彼等の論文(?)を馬鹿にしていたようだった。

後日の帰国列車で、スターリンに感謝状を提出するので署名せよとのことだったので、何が感謝か、馬鹿馬鹿しいと署名せずにいたが、貴方一人が署名してないのでどうにかして欲しいとのこと、やむを得ず名前前の「末」を「末」として、これなら私の名ではないから良いと自ら納得して署名した次第であった。

抑留中の生活と極限状態における意識

二カ年の抑留中、飢えと寒さにはいささか閉口したが、伐採、鉄道の線路造り等適当に手抜きをしたためか重労働とはならず、どうやら帰国できたのは幸運であった。

収容所生活一カ年経過した頃だったか、捕虜オリンピックを開催することになった。終戦前、地下足袋で走り高跳は一メートル六十センチくらい軽く跳んでいた。そこで試してみたところ、一メートルの高さがどうしても腰が砕けて跳べず、あまりのことに愕然とした。また、入営前は米俵一俵六十キロを肩に持ち上げていたが、復員後試したところ、全然地面より離れず情けなかったのを覚えている。さて、オリンピックにはもちろん出場しなかったが、どうなったか全然記憶がない。ただサッカーの試合を数カ国のチームで行ったのは覚えている。というのは、我が日本男子の威力を示すため、試合当日まで選手諸君に我々の食糧を援助しようということになり、たしか一人一日一グラムあてだったと思うが、彼等の食事の援助をした。といっても五千人で五キログラムだから少々はたしになったか

もしれないが、残念ながら試合の結果は失念した。

極限の中での生活はなかったものの、いつ帰国するとも分ならず、毎日の単調なというか希望のない日々であったが、幸いにもグループの人達が皆善人で、仲良く生活（送日）できたのがよかったのかもしれない。特に隣のI中尉はなかなかの博学多識者で、彼の高邁なる高説を作業への往復途中に拝聴する度に、何か心洗われるような気分になり楽しかった。時には言葉遊び、諺、漢字、四字熟語、動植物等々、お互いの蘊蓄を出し合って無聊を慰めていた。このことがどれほど心に安らぎを覚え、私の弱い脳へ刺激を与え、時でも身の不運・辛い境遇を忘れることができたことかと、今でもI中尉に感謝している。五十数年経った現在も文通を続け、当時のことなど、今となっては懐かしい思い出として時折便りにしたためである。

帰還

昭和二十年十月中旬、ビュンスクの軽便鉄道の路線建設作業中、通訳のT君（彼は入ソ後、ロシア語を習得、通訳をしていた）が、「ダメイだ！ダメイだ！」

と大声を上げながら我々の所に走り寄って来た。思わず一同、「本当か？ バンザイ、バンザイ」と欣喜雀躍、よかった、よかった、頑張った甲斐があった、とお互いに喜び合った。一緒に作業していたソ連人達も、「よかったネ」と喜んでくれ、中には、日本に帰ったら手紙をくれと女から言われたと鼻の下を伸ばしている者もいた。

マルシャンスクに帰り、我々は兵に続いて二回目のダモイらしかった。大尉以上は次回になるとかで、彼等はシュンとしていたようだった。帰還者名簿が読み上げられる前に注意があった。「前回のとき、タイプの手が自分の名を打って帰ってしまった。この度はソ連人が名簿を作成したので、少々間違っているようでも自分らしい名前ときは躊躇することなく大声で返事をする」との親切でありがたい注意事項であった。

名を呼ばれることに、「よかった、よかった」と手を取り合って喜ぶ姿があちこちで見受けられた。

帰還への道程は往路の逆で、シベリア鉄道で荒野を

走ること二十日間でナホトカ到着。ここまで来てても反動と睨まれて再び収容所送りとなった者がいるので、言動にはくれぐれも注意するようにとの注意があった。ここはテント生活。すぐそばの極楽坂を越えればナホトカの港にすぐとのこと。はやる心を抑え、あと一、二日の辛抱と、おとなしく何でもハイハイと模範初年兵そのもの。おかげで全員、二日目に永徳丸に乗船できた。

出航しても領海を離れるまではナホトカに引き返すこともあると物知り顔で言う者もいたが、領海を離れたかと思われる頃、船室の中央広場が騒々しいのでぞいて見ると、何と日章旗を広げている者がいるではないか。顔見知りのD少尉だった。「俺は必死になってこの日の丸を守り続けて来た。祖国日本を忘れ、日の丸を忘れたのか。日本と天皇陛下を悪し様に批判し、更に許し難いのは、日本人でありながら同じ日本人の我々の多くをブルジョア民主主義的とか称して、精神的、肉体的に苦しめた奴等がいたではないか。ここで彼等の真意を糾明しようではないか」と叫んでいる

た。「そうだ、そうだ！引っ張り出せ！」と皆の声。中には「海に叩き込め！」と物騒なことを叫ぶ者もいた。そこへ復員官が来て、「どうか手荒いことはしないでくれ」と懇願されたので了承し、数人のいわゆる民主的指導者が引っ張り出され、衆人環視の中で吊るし上げに遭った。抑留中は虎の威を借る何とやらで、我々の上に傲然と君臨していた当時の面影はなく、ブルブルと身震いをしているのは哀れでもあった。

一日目の朝と思うが、甲板に上るとそろそろ内地が近づいて来る気配がした。数年間見なかった日本の山脈がはるかに、夜明けとともにボンヤリと見えて来た。いよいよ日本だ、内地だ。舞鶴の山々が見え出したら涙が出るかなと思った。ナホトカ出港の時は見渡す限り灰色と雪、何という違いか、日本の景色……。山も野も青々としているではないか。目にまぶしい緑だ。日本の緑は数年振りだが、こんなに美しいものは知らなかった。涙が溢れてきた。とめどなく溢れる涙は頬を濡らした。ふと周囲を見渡せば、誰も彼も無言で、頬を涙で濡らしながら懐かしい日本の山々を、

風景を食い入るように眺めている。

舞鶴上陸は昭和二十二年十一月十九日午前であった。

それから

入営後七年九カ月でようやく故郷の土を踏んだが、ちょうど我々が復員した頃は「天皇島上陸」というような騒ぎもなく、至って平穩裡に復員したためか、特別に就職についての指導も援助もなかった。従って就職には苦労したし、ようやく知人の口利きで村役場に就職することができたのは復員後五年目、それまで四回も職業を転々とした。内地や中国などよりの早い復員兵がすでに就職しており、最後まで出発点の遅れが尾を引いて貧乏籤がつきまとった。もちろん自分の無能力のせいもあったが……。

復員直後、弟が産まれた。私の実母は私が十七歳のとき死亡し、その後、父の後妻の四人目の子である。合計六男三女の貧乏人の子沢山とは我が家のことかと感激ひとしおのものがあつた。

この弟の出産に立ち会った産婆さんがいろいろと政

治的なことを話し、また質問もするので、女性も終戦後、こんなに政治に関心を持つようになったのかと感心した。ところで、ソ連での感想を聞かれたので、ここぞとばかりに小生の意見を述べ、現地の実情、特にソ連住民の生活環境の劣悪さと、親子でも本当のことを話せない密告制度等、精神的重圧下の状況を話し、私も貧乏育ちゆえ、ある程度共産党に興味を持っていが、「ソ連留学」のおかげで共産党は大嫌いになり、もちろん入党は取りやめたと言ったら、「それですか」とのことであった。後ほど聞けば、彼女は当村三女傑の一人と言われ、共産党員とのことであった。

末弟も三歳のとき母が死亡し、父も小学一年生のと き事故死し、結婚していた二人の弟を除き、我が子三人と六人の弟妹の面倒を見ることになった。貧乏に慣れているとはいえ、貧乏は辛かった。いまま少し早い復員員であったら、もう少しましな仕事にもありつき、収入も多かったものをと悩んだこともあった。しかし、歲月はありがたいもので、悩み苦しみつもすでにそれより五十数年。三年前の心臓手術の予後も順調に、

日常の生活を営みつ、男子の平均年齢をすでに二年も超過したことに感謝しながらの毎日である。

村が合併し市役所職員となったが、五十六歳のとき狭心症発作が起こり、意を決して退職した。年金は至って少額だが、発作もおかげで出なくなつたが、何のかんのと仕事を押しつけられ、勤務中より忙しいではないかと苦笑したこともあった。

退職後二十数年間に、今までの恩返しと、及ばずながら地区の皆様のために少しでもお役に立てたのではないかと、心密かに思っている今日この頃である。

ソ連抑留生活の思い出

三重県 浜口 禎 祐

私達一二一五部隊の将校平岡部隊長、秋本中尉、鹿兒島中尉、近衛中尉、高橋中尉、浜口少尉（私）は、間島延吉に集結。途中、近衛中尉は入ソ。その後、私達は二十五日間貨車に乗り、タートル州のラーダ、エ